明治後期地方都市における商工名鑑的「繁昌記」の出版

——山内實太郎編『松本繁昌記』を事例に——

網島　聖

はじめに

第一節　問題の所在と本稿の目的

近年の近代都市史研究の深まりに伴って、都市の空間構造や構成員を明らかにする多くの新史料が利用されるようになり、[1]民間の手による地図や名簿にも関心が集まっている。[2]本稿はこうした動向に呼応して、明治三〇（一八九七）年頃を中心に全国各地で見られた「繁昌記」と題する刊行物を商工名鑑的出版物として位置づけ、その近代都市史研究における意義を考察するものである。

「繁昌記」と題する書物は天保七（一八三六）年に出版された寺門静軒著『江戸繁昌記』を端緒とし、明治七（一八七四）年出版の服部誠一（撫松）著『東京新繁昌記』によって全国にその流行が広まったとされる。[3]日本文学の分野においては、遊里を描写する竹枝類や中国艶史の影響のもとに、都市のさまざまな局面をそこに登場する市井の人物とあわせてスケッチする、幕末から明治にかけて流行した漢文戯作の一ジャンルに位置づけられる、正統な地誌に描かれていない各土地の卑近な世態風俗を記した案内記・紀行文・地誌に類する書物とされる。[4]

これに加えて、風俗史の立場から「繁昌記」を検討した熊倉功夫は、[5]函館の事例に即して、明治三〇（一八九七）年頃の「繁昌記」の内容が、戯作的読み物としての「繁昌記」とは明らかに異なり、商工業者の名鑑的なリストを含む「町そのもの、あるいは商工会の自己証明」としての形態をとるようになったとし、明治三〇年頃に戯作的「繁昌記」から「案内記」への変化が見られると指摘した。

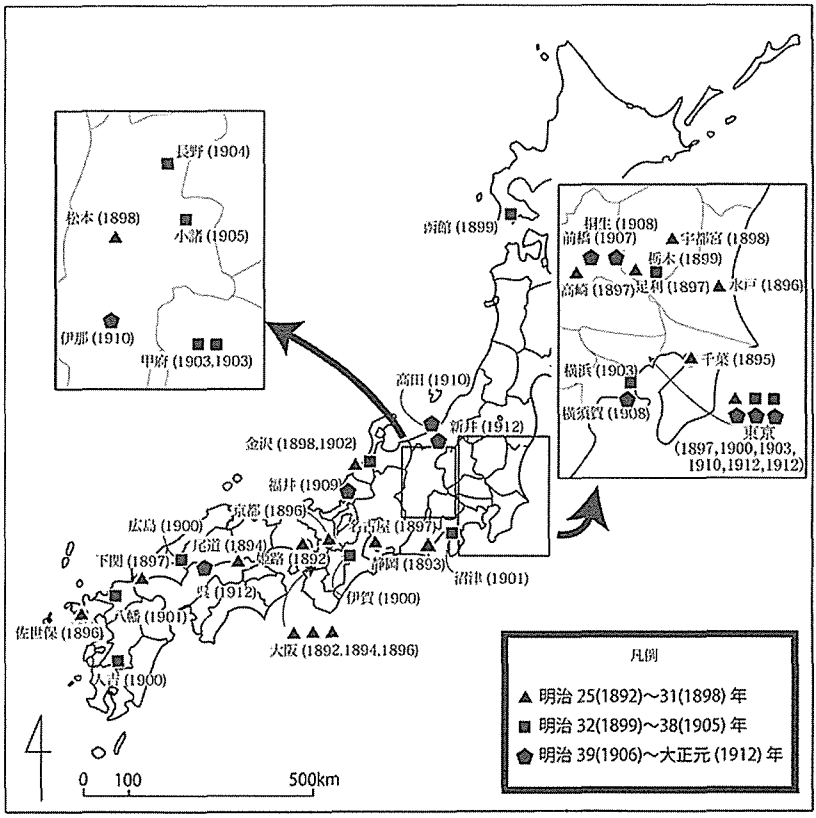


図1　明治25〜大正元年に発行された「繁昌記」（国立国会図書館所蔵）の分布図

以上のように、既往研究では「繁昌記」の系譜が概説されてきたが、文学史的、風俗史的な価値の評価に重点があり、都市史研究の立場から検討したものは見あたらない。そのため、商工名鑑的「繁昌記」には積極的な地位が与えられず、その内容も具体的に明らかにされないため、その都市史的な資料価値は必ずしも知られていない。

そこで、明治三〇年前後の明治後期二〇年間に出版された「繁昌記」を取り上げてみると、全国各地で少なくとも四四点出版されている。とりわけ東京と大阪でそれぞれ三点以上集中して出版されているが、他の多くの地方都市でも当該期間中に一〜二点の出版がみられる[6]（図1）。

このうち、松本町については、いずれの大都市圏からも一定の距離がある上、山内賓太郎編『松本繁昌記』の出版が地域の出版界を刺激し、周辺地域における類書出版のさきがけとなったことが既に指摘されて

いる。[7] したがって、山内編『松本繁昌記』は、全国的な明治三〇（一八九七）年前後における地方都市「繁昌記」出版の動向を考察する上でふさわしい事例といえるだろう。

本稿は、明治三〇年頃の日本各地において、民間により編集・出版された商工名鑑的「繁昌記」の一事例として山内編『松本繁昌記』を取り上げ、その内容や出版の文脈が持つ都市史的意義を考察することを目的とする。その際、当時の二つの社会的背景に注目する。一つは松本町への鉄道敷設であり、いま一つは欧米からの「ダイレクトリー」（Directory）というジャンルの出版物の移入である。

「ダイレクトリー」は広く欧米で出版された歴史を有し、特に英国においては近代地方史の貴重な史料と目されている。若干のバリエーションがあるものの、地方都市において出版された'Trade Directory'や'General Directory'は、商工業者や都市居住者の一覧に加え、地域の地誌や歴史に関する記述をまとめたものとされる。[8] これは本稿が紹介しようとする商工名鑑的「繁昌記」に通じる内容といえるだろう。「ダイレクトリー」というジャンルが日本に移入されたのは、明治二五（一八九三）年発行の白崎五郎七編『日本全国商工人名録』が初めであるとされ、[9] 熊倉が示唆する商工名鑑的な「繁昌記」が出現しはじめた時期とほぼ重なる。『日本全国商工人名録』との比較によって、商工名鑑的「繁昌記」の性質をより明らかにすることが期待できるだろう。

① 例えば、大石嘉一郎・金澤史男編著『近代日本都市史研究―地方都市からの再構成』日本経済評論社　二〇〇三年、収録の各論考や、松村敏『近代日本における地方商人層の動態――明治中期、金沢市の事例から――』（『商経論叢』四〇（一）　二〇〇四年　三五～七一頁）、田中和子「近現代期京都の富裕層と都市空間構造」（『平安京―京都―都市図と都市構造』収録、京都大学学術出版会　二〇〇七年　二一一～二三一頁）、などの成果がある。

② 例えば、牛垣雄矢「昭和期における大縮尺地図としての火災保険特殊地図の特色とその利用」（『歴史地理学』四七（五）　二〇〇五年　一～一六頁）、岡島建「近代の商工地図とその利用――神奈川県の例を中心に――」（『人文学会紀要』三四　二〇〇一年　九九～一一五頁）、中西僚太郎・関戸明子編『近代日本の視覚的経験――絵地図と古写真の世界――』ナカニシヤ出版　二〇〇八年、などの成果がある。

③ 前田愛『都市空間の中の文学』ちくま学芸文庫　一九九二年（初出一九八二年）一一九～一四四頁。

④ 新稲法子「繁昌記物の研究序説」（『兵庫大学短期大学部研究集録』三二　一九九九年　一三〇～一四〇頁）。

⑤ 熊倉功夫「解説」（『日本近代思想大系風俗性』収録、岩波書店　一九九〇年　四八六～四九二頁）。

⑥ 国立国会図書館所蔵の明治二十五年から大正元年の出版物のなかで、題名中に地名に加えて「繁昌記」ないしは「繁盛記」の文言を含む書物で、出版地と題名に含む地名が隔たっていないものを示した。

⑦ 長野県編『長野県史　通史編第七巻　近代編一』一九八八年　八三八～八三九頁。

⑧ Shaw, G. 'Directories as sources in urban history: a review of British and Canadian material' *Urban History* 11, 1984, pp.36-44; Shaw, G. and Coles, T. 'European directories: a universal source for urban historians' *Urban History* 22, 1995, pp.85-102; P. J. Corfield, with Serena Kelly "Giving directions to the town': the early town directories' *Urban History* 11, 1984, pp.22-35. Shaw, G. "British directories as sources in historical geography" *Geo Abstracts*, 1982, pp.5-22.

⑨ 松本康正「都市職種分析資料としての商工人名録」(『史観』一一四一九八六年 二七~三八頁)。なお、横浜、神戸、長崎、香港等の開港場で発行された英文の'Japan Directory'が一八六一年刊行分からその存在が確認されている。しかし、出版地や言語の特性から日本国内で一般に流布したものとは考えられず、今回の検討からは除外した。乙部純子「一九世紀末の横浜外国人居留地の景観――「横浜真景一覧図絵」からみた土地利用状況――」(『歴史地理学』四四(五) 二〇〇二年 二二~三七頁)参照。

第一章 松本における「繁昌記」出版の目的と系譜

第一節 山内實太郎編『松本繁昌記』の内容構成と出版の目的

山内編『松本繁昌記』は本文二六四頁で、前、中、後の三編からなる(表1)。また、巻頭には松本町市街地の概略地図に加え、ランドマークや有名商店などの写真が四三頁、七六点、広告が五〇頁、七五点掲載されている。装丁は洋装の並製本で、頒布価格は二五銭である。これまでのところ、現存する原本としては、国立国会図書館所蔵本、県立長野図書館所蔵本、松本市中央図書館所蔵本、そして復刻版の原本の四点を確認した。いずれも初版第一刷であると考えられ、本文の内容にも異同はなく、増刷や改版は確認できなかった。①

編著者の山内實太郎は旧松本藩士族出身の印刷業者であった。最初、松本町の新聞「信陽日々新聞」及びその後継紙である「信陽日報」の営業部員として活躍したが、廃刊後はその再興に尽力してさらに後継の「信府日報」の立ち上げに関与した後退職し、石版印刷業郁文堂を松本町内六九町に開業した。郁文堂は長野県における石版印刷業のさきがけとされる。② また、凡例からは前篇を二木氏が執筆したものであることが読み取れる。二木氏とは、松本町に本拠のあった新聞『産業新聞』や『信濃民報』で主筆を務めた二木毒龍をさし、山内編『松本繁昌記』の出版は松本町の新聞関係者が中心となって進めた企画であることがわかる。③ その一方、凡例中には執筆の資料として「慶林堂」等の手録を参考にしたと述べられており、後に述べる慶林堂高美書店をはじめとする地域出版業者の関与もみとめられる。④

巻末に示される「売捌所」には、松本町下にある五軒の書店の

表1　松本町における「繁昌記」とその類書の内容構成

題　名	編著者	出版年	出版者	目　次　構　成
松本繁昌記	浅井洌・関口友愛	明治16（1883）年	高美屋書店	緒言(4)、総論(19)、裁判所(29)、町人会(25)、人力車(15)、密売淫(30)、初市(上20-34)
松本繁昌記	山内實太郎	明治31（1898）年	郁文堂	前編：緒言(1)、松本の昔日(1)、松本の沿革(6)、松本の古社(3)、松本の古寺(4)、松本の名勝(3)、松本の古跡(3)、松本の四季(2)、松本の祭り(1)、松本の人情(1)、松本の風俗(1)、松本の繁昌(2)、松本の将来(3)、中編：松本に於ける有名の商家(151)横田遊郭浅間温泉(15)、後編：松本地方に於ける有名の秋蚕種家(53)
松本案内	中澤幸太郎	明治41（1908）年	深志時報社	緒言(2)、松本の地勢と沿革(4)、松本に関する古説(5)、鉄道各駅と重なる町村(3)、松本を起点とせる里程表(4)、松本の重要物産(8)、松本平の蚕業(6)、松本の官衙公署学校(2)、松本の銀行会社其他(1)、松本の旅館遊楽場其他(1)、松本平著名の商工業家及び蚕業家(27)、松本の社寺(6)、松本の古跡と名勝(5)、松本の初市と神道祭(2)、松本付近著名の社寺(24)、松本付近の古跡名勝(10)、古跡名勝に関する詩歌(5)、松本付近の温泉(19)
松本案内	松本案内編集部	大正10（1921）年	明倫堂書店	序(1)、松本地方の俗謡(5)、地理(1)、歴史(9)、松本市の市街(3)、松本市と交通(24)、松本市の財政(4)、松本市の産業(5)、松本市の教育(4)、官公衙と所在地(1)、新聞雑誌社と所在地(1)、銀行及び会社(2)、旅館と料理店(2)、演芸と興行(1)、神社と仏閣(10)、名所旧跡(9)、温泉案内(11)、日本アルプス(6)、高原の歌(16)

＊（　）内の数字は頁数を表す。

ほか、『長野繁盛記』の発売所でもあった長野市の「西澤書店」を除くと、全てが南北安曇郡、木曽郡、東西筑摩郡、諏訪郡、上下伊那郡に属しており、[5]旧来からの松本町周辺地域と目された中南信地域が主な販売先となっていたことがわかる。

前編は緒言に加え、松本町の歴史や寺社仏閣、風俗の案内から、将来的な地域振興への展望にわたる網羅的な地誌記述、四一頁からなる。中編は松本町中心市街地の商工業者の紹介文、一六七頁からなり、後編は松本町に隣接する東筑摩郡および南安曇郡の秋蚕種業者[6]の紹介文、五四頁からなる。

続いて、出版の目的について緒言の内容を検討していく。

【史料一】　山内實太郎編『松本繁昌記』一頁

松本繁昌記は如何なる必要ありて著されしや、（中略）此く江湖の歓迎を受け日本全国に行渡らんとする今日にありては何分の必要ありたること明白なれば彼此れ弁疏を試むるは却て野暮の沙汰なる可し（中略）繁昌記には江戸繁昌記以来殆んど一定したる体裁あるに拘らず著者は何故此る破

格をなしたるや、（中略）極無造作に書きしなり、併し夫れでも悪いとならば案内記として読むも可なり（中略）昔李文叔と云ふ先生あり洛陽名園記に題して曰く園圃之興廃洛陽盛衰之候也且天下之治乱候於洛陽之盛衰而知洛陽之盛衰候於園圃之興廃而得則名園記之作余豈徒哉と、繁昌記は猶名園記の如し

繁昌記が広く流行していることを挙げ、全国各地方の「繁昌記」ブームにあやかった出版であったと述べられる。ただし、網羅的な「無造作」な記述を目指して、それまでの「繁昌記」と比較すれば「破格」の「案内記」に類似した内容となったとする。ここから、戯作的な「繁昌記」から商工名鑑的な「繁昌記」への移行は、少なくとも山内編『松本繁昌記』の場合には、明確に意識されていたことがうかがえる。なお、その背景として国家繁栄の基礎として地方の振興を重視し、「繁昌記」の出版が地域の振興に資するという目論みが仄めかされている。

第二節　松本町における「繁昌記」出版の系譜

先に触れたように、既往研究においては、明治三〇年頃を画期として、戯作的「繁昌記」から「案内記」、すなわち商工名鑑的「繁昌記」への移行が生じたと指摘されている。松本町においても同様の変化があったのか、類書の出版を通時的に整理して確認しておこう。

松本町で出版された「繁昌記」と題する書物には、山内編『松本繁昌記』以前に、明治一六（一八八三）年出版、浅井洌・関口友愛共著『松本繁昌記初編』（初編のみ刊行）が存在する（表1）。著者二人は旧松本藩士族の教員であり、そして自由民権派知識人でもあった。[7]

浅井・関口共著『松本繁昌記』においては、士族出身の自由民権派知識人であった著者たちの関心を反映して、「裁判所」「町村会」「密売淫」といった政治や社会問題と密接に関係した記述が多い。その一方で、商工名鑑的な内容は全く含まれていない（表1）。

著述の目的については緒言に以下のように示されている。

【史料二】　浅井洌・関口友愛共著『松本繁昌記』緒言一頁

世ノ変遷推移時ノ人情風俗ヲ記載スル者之ヲ称シテ開化史繁昌記ト云（中略）遇々慶林堂主人視テ以テ印行ニ上センコトヲ促シ曰ク向者長尾無墨先生善光寺繁昌記ヲ著シテ長野ノ名益々四方ニ顕ル我カ松本ノ繁華世人称シテ信中第一トナス而シテ未タ之ヲ記スル者アラス

このように、文明開化の風俗を記録することを著述の目的とし

ており、明治初期である文明開化期の戯作的「繁昌記」出版の傾向に従っていることがわかる。また、県下ライバル都市長野では長尾無墨著『善光寺繁昌記』[8]が出版されたという競争関係も背後に示されている。

次に、山内編『松本繁昌記』以後に出版され、「案内」の文字をタイトルに含む類書をみていく。まず、明治四一（一九〇八）年出版の中澤幸太郎著『松本案内』がある（表1）。発行した深志時報社も松本の新聞社であり、中澤はその社長と主筆を兼ねていた。中澤は後に松本の市会議員にもなった人物である。[9]

その内容は「松本附近の古蹟名勝」を含むようになり、市街地から周辺部へ収録の範囲が拡大している。商工名鑑的な記述としては、「松本平著名の商工業家および蚕業家」と題する詳細な紹介文があるが、取り上げられる数は養蚕家六軒、製糸業者五軒、松本の商工業者が一二軒で合計二三軒に過ぎず、山内編『松本繁昌記』に比べると非常に少ない。一方で、山内編『松本繁昌記』には見られなかった官庁や学校等の公共施設の紹介文が加えられる。

次に、出版の目的について以下に緒言を見てみる。

【史料三】　中澤幸太郎著『松本案内』緒言一頁

時運は遂に一転して先には篠の井線及び中央東線の全通するあり、久しく山間の一都として埋れたる松本は、俄然、帝都と北陸を連絡する中間枢要の街衢となり、（中略）其天下に誇り得べきものは独り商工農蚕の業に止まらず、天与の仙境、山高く水清き信中の一都会として、所在古跡名称探るべきものも決して少なきにあらず、之れ本書の著ある所以にして、一は以て松本の地を汎く天下に紹介し、他は将来益々増加せんとする旅客の為に案内たらんを期する

「南信七郡の首都」として松本の地位が示した後、鉄道敷設を契機として、松本町の魅力を広く紹介することが出版の目的と述べられる。その際、「商工農蚕の産業」と並んで、他地域には無い観光資源の案内が、旅客を対象として意識されている。

最後に、大正一〇（一九二一）年出版、松本案内編輯部編『松本案内』が挙げられる（表1）。松本案内編輯部は発行した明倫堂書店関係者によって構成されたと考えられる。明倫堂は慶林堂高美書店から暖簾分けした鶴林堂の店員であった関寅市が独立して起した出版社であり、高美書店を中心とした地域出版業者のグループ中に存在した業者である。[10]

その内容は、松本市街ではなく、隣接する日本アルプスや高原に関する記述が中心になる。商工名鑑的な商店や地域の名士を紹介する記述は存在せず、新聞社、銀行、大規模な会社に加え、旅

館と料理店の名称と連絡先のみが列挙されている。

出版の目的については序文に以下のように示される。

【史料四】　松本案内編輯部編『松本案内』序一頁

松本市に関する書物にして（中略）徒に膨大粗雑にして統一なく、真に旅客の指針となり便宜と満足を与ふるもの少なし（中略）電鉄敷設に拠り、高原の都市として一大飛躍を為さんとする松本市の現状を紹介し、（中略）彼雄大なる日本アルプスを紹介するものに至つては、全く絶無なり、著者茲に鑑むる処あり、松本市を中心に周囲の自然を概説して、敢へて旅客の参考たらしめんとす。

従来の松本町における案内書が網羅的な内容であることを批判し、新たな鉄道敷設を背景に、松本を訪れる観光案内に目的をしぼった統一的内容を目指していることがわかる。

以上のように、松本町においても、明治三〇（一八九七）年頃を画期として、戯作的「繁昌記」から商工名鑑的「繁昌記」の出版へ、さらに観光案内へと移行した様子が確認できた。そして、山内編『松本繁昌記』は出版の目的や商工業者紹介の記述内容の点で、それ以前の浅井・関口共著『松本繁昌記』や後年の松本案内編輯部編『松本案内』などとは異なる、特徴ある出版物となっていた。すなわち、当該期の「繁昌記」は、単に戯作的な「繁昌記」が衰退する過渡期の産物ではなく、地域経済の振興に主眼がある商工名鑑的出版物として、独自の目的と内容を備えた出版物ととらえることができるだろう。次章では、こうした商工名鑑的「繁昌記」に特有の内容について、山内編『松本繁昌記』に即して検討する。

① 復刻版は一九八二年に長野県豊科町の山麓舎（すでに廃業）から出版された。本文二六四頁、図版四四枚で、装丁は保存を考えて上製本となっている。広告、写真類を含む図版が全て巻頭にまとめられている。山麓舎の元経営者に問い合わせたところ、その原本は既に存在しない松本町の商家に所蔵されていたものであったことが確認できた。同様に個人で所有されている新たな原本が今後確認される可能性は十分あるが、松本市文書館所蔵の家蔵史料などによったこれまでの調査からは、新たな山内編『松本繁昌記』原本とその増刷に関する手掛りをえられなかった（松本市文書館『松本市文書館史料目録　第一～四集』一九九九～二〇〇一、二〇〇三年）。なお、国会図書館所蔵本、県立長野図書館所蔵本、松本市立中央図書館所蔵本では、巻頭巻末の広告や写真に限ると欠落や順の不同など収録状況がそれぞれ異なり、増刷や改版があった可能性も完全に否定できない。しかし、広告の欠落や順不同は、県立長野図書館での聞き取りによると、伝存している当時の当該地域の出版物に広くみられる一般的特徴であるとされる。また、松本市立中央図書館での聞き取りでは、かつての修復作業などの結果である可能性も否定できないとのことである。本文中の内容には異同がないことや、広告に付されたページ番号が同一であり、広告内容の差し替えは確認できないことから、破損や製本・修復時の錯誤に由来する可能性が高いと考え、今回は同じ版によるもの結論付けた。

なお、復刻版は広告に付されたページ番号から広告についてもほぼ完全な状態で掲載されていると考えられるが、国会図書館所蔵本では奥付裏にある「松本繁昌記売捌所」のみが脱落している。

② 松本市『松本市史第二巻　歴史編Ⅲ近代』一九九五年　四六四～四六五頁、浜野良平『新松本繁昌記』信州社　一九六九年　二三八～二三九頁、三澤啓一郎『信濃人事興信録』信濃人事興信録　一九二二年　二四四頁参照。

③ 先述のように、山内編『松本繁昌記』の強い影響下に出版されたとされる『長野繁盛記』であるが、その巻頭「例言」には原稿を執筆したのが「二木毒龍」であると記される。さらに『長野繁盛記』広告中には、長野市での出版物であるにもかかわらず、例外的に松本町の業者である郁文堂が掲載されていることから、山内が『長野繁盛記』の出版に何らかの形で関与したとみて間違いなかろう。したがって、山内、二木の両氏が協力して「繁昌（盛）記」の出版企画を行っていたと考える。岩井熊蔵『長野繁盛記　一名善光寺案内』丸上商店　一九〇四年　例言一頁、大島卓爾『信濃新報　三十週回顧史』信濃新報社　一九三九年　四～五頁参照。

④ 慶林堂はいまなお松本市本町に存続する高美書店のことであり、山内編『松本繁昌記』中編においても、本町二丁目に紹介されている。高美書店は近世後期以来、周辺地域に冠たる書肆とされる。鈴木俊幸『江戸の読書熱――自学する読者と書籍流通――』平凡社　二〇〇七年　七三～一四四頁参照。なお、明治以降には後述の浅井・関口共著『松本繁昌記』を出版するなど、松本町において「繁昌記」類書の出版ノウハウを持っていたと考えられる。上條宏之「開化史としての松本学の成立――関口友愛・浅井洌交著『松本繁昌記』の検討を通して――」（『松本市史研究　松本史文書館紀要』一〇　二〇〇〇年）参照。

⑤ 「松本繁昌記大売捌所」として、松本本町一丁目知新堂、松本大名町鶴林堂、松本本町二丁目慶林堂、松本本町一丁目松栄堂、松本本町一丁目水琴堂、長野市西澤書店、上諏訪町日新堂、東穂高町小川書店、池田町勝山書店、木下町開明堂、洗馬都築文明堂、大町松本正信、坂下町福澤文昌堂、飯田町皆川文昌堂、赤穂町信陽堂があげられている。なお、『長野繁盛記』の発売所には、長野市大門町西澤喜太郎、長野市新田町朝陽堂、長野市東町河原三平、長野市大門町増屋書店、長野市元善町金華堂があげられており、西澤喜太郎（西澤書店）は「信陽日々新聞」（「信陽日報」の継続前紙）の売捌所でもあった。（信陽日日新聞三三号明治一五年一月六日）

⑥ 明治中後期にかけての東筑摩郡における養蚕業の推移を見ると、第二章第一節に後述するように、明治二〇（一八八七）年頃を画期として秋蚕の養蚕家、生産量がともに増加しており、秋蚕種が地域の重要産業と目されていたことがわかる。

⑦ 前掲註④上條論文　六九～七〇頁参照。

⑧ 長尾無墨『善光寺繁昌記』松葉軒　一八七八年。詳細については、前掲註④上條論文六九頁参照。

⑨ 前掲註②『松本市史』五〇六頁、前掲註③『信濃新報　三十週回顧史』五頁参照。

⑩ 矢ケ崎栄次郎『回顧の五十年　鶴林堂書店史』鶴林堂書店　一九四一年　七九～一〇五頁、一九〇～一九二頁参照。

第二章　山内編『松本繁昌記』における商工名鑑的内容の分析

第一節　商工業者紹介文の検討

山内編『松本繁昌記』は中編で松本町の商工業者二四六軒を、後編で隣接する東筑摩郡および南北安曇郡の秋蚕種家六七軒を紹介している。『長野県統計書』によれば、同年次の統計値は入手できないが、松本町の商業者については、明治二五（一八九二）年度に卸売二九八軒、仲買一八九軒、小売一六七二軒で合計二一五九軒あり、全業者の一〇％強が紹介されていると類推される。また、秋蚕種家については、明治三〇（一八九七）年度の東筑摩郡と南安曇郡を合わせると二一九五〇軒となっており、[1]ごく限られた業者のみが記載されていることが分かる。

本文中では、掲載された商工業者について様々な情報が紹介されている。[2]中編から本町一丁目「大徳商店」を例にとって具体的に見てみよう。「大徳商店」についての記述分量は一八文字×二六行になる。

【史料五】　山内實太郎編『松本繁昌記』中編四七頁

大徳商店は本町一丁目東側にあり千歳橋橋詰より南へ四軒目なり（中略）砂糖及米穀類の問屋にして大徳の名は夙に遠近に聞へ此近傍著名の老舗なり（中略）砂糖類は皆其産地より直輸入するものなれば遠州駿州名産の和砂糖は勿論横浜東京を経て輸送し来る洋砂糖の類迄売買取引非常に頻繁にして当町に於ける菓子製造者の大半は其原料を此店に仰がざる無く其他南北安曇郡の内豊科池田穂高大町の如き西筑摩郡福島地方の如き上下伊那方面の如き何れも唯一の好取引先なる

まず、位置については、通りに面してどちら側にあるのか、目印となる場所を起点とした場所の指定などがなされている。次に特徴的な業務の内容と問屋や卸小売といった業態の別、そして取扱商品について説明している。さらに、取扱商品の有名産地を中心とした仕入先と商品の販売先に関する情報が示されている。

こうした記述内容の全体の傾向を検討してみる。まず、中編で製造、卸、小売の別といった業態の違いを記載しているものが六二軒あり、そのうち製造とあるものが一四軒、卸、小売を兼ねるものが三四軒、卸売専業あるいは問屋専業とあるものが三軒、小売専業が二軒となっている。このように、卸、小売を兼ねる業者が多いが、六九町「浅井太物商店」紹介文には、「市中卸売業者又甚だ少からざれども多くは小売を兼業とするを以て憾念多し」（一六一頁）と編著者の側では卸売専業の業者を高く評価する向

きがあったこともうかがえる。

次に、商品の販売先についての記述は大きく四つに分けることができる。販売先に関する情報が示されているのは中編で四八軒あり、（一）販売先を市中近在とするもの、（二）南北安曇郡、諏訪郡、上下伊那郡、東西筑摩郡、の旧筑摩県に属する南信州七郡、（三）近隣他府県および北信州、（四）遠方の他地域に分けられる。このうち複数のカテゴリーにまたがるものも相当量あるので重複を含むが、（一）を含むものがのべ一六軒、（二）がのべ二七軒、（三）がのべ一二軒、（四）がのべ九軒となる。遠方を示す（四）が比較的少ない一方で、南信七郡を示す（二）が多く、販売先として重視されていたことが分かる。これらの地域を主要な販売先と目していたのは、遠隔地商業を営む卸売業者ではなく、地域経済に根ざした卸売業者や小売業者であろう。これに対して、秋蚕種業家を扱う後編で販売先に関する情報が記述されているのは三六軒であるが、そのほぼ全てが群馬、埼玉、茨城、千葉といった関東地方を中心とした他府県であり、販路の開拓に関する逸話なども記述されている。県下や近隣の地域については五軒のみが下高井郡を中心とする北信州への販売を併記しているにとどまる。後編で紹介される秋蚕種業家が中編の商工業者と異なり、より遠隔地との取引を志向していたことがわかる。

こうした紹介文は業者によって分量に多寡がある。中編で紹介される業者ごとの行数を、立地に分けて比較したものが表2であり、これに対応して松本町中心市街地を示したものが図2である。江戸時代の松本城下町は侍屋敷と町家に大きく区分されていた。女鳥羽川以北が武家地で、川南から城東に町人地がおかれた。特に善光寺道に沿った、問屋街の本町、中町と宿場町でもあった東町をあわせて親町と称し、城下町の中心部を形成していた[3]。

掲載された業者の数は、旧町人地が七六％を占め、武家地が一六％、その他が八％と続く。町人地の紹介数が多いことが目立つが、記述量に注目すると分量の多い例は特定の町のみに限定されていたわけではない。全体を通じて五～七、一一～一三、二三～二五行の業者が目立って多く、これらの分量を目安とする範疇ごとに紹介文が作成されたのではないかと考えられる（表2）。

この点についての手がかりとして、凡例中に「紹介文及写真版の掲載は総ていろは順を以てし其同一なるものは受付の順序に依れり」とあり、紹介を希望する業者を出版者側から募集し、順次受け付けたものと考えられる。さらに続けて「紹介文は心付のまにまに信用ある所の人々のみを掲げたり」とあることから、「心付」による資金提供と紹介文の多寡に関係があったと推測される[4]。また、第一章で述べたように、山内編『松本繁昌記』の出版は新

表２　山内編『松本繁昌記』における商工業者紹介文の記述量と立地の関係

紹介文の行数	1-4	5-7	8-10	11-13	14-16	17-19	20-22	23-25	26-28	29-31	32-（行）	紹介業者の合計
A．本町		8	1	7	4	4	5	19	7		6	61
B．博労町	1	4	3	2			1	4				15
C．逢初町					1							1
D．中町	5	4	1	1			3	3	2		2	21
E．裏小路		1	1	1			1					4
F．伊勢町	3	3	3	8		2	1	5			1	26
G．巾上	1	1		1								3
H．渚		1		1								2
I．高砂町		1		3		1						5
J．飯田町		1		1	1			1				4
K．宮村町				3			1					4
L．清水						1		1			15＊	17
M．大名町	2	3			1			1	1		1	9
N．土井尻									1			1
O．六九町		1	1	3	2			3	1			11
P．今町	2	2		1				3				8
Q．白板							2				1	3
R．辰巳町			3				1					4
S．緑町	2			1								3
T．大柳町				1								1
U．上ヶ土				1	3	1						5
V．下御馬出し		2		1								3
W．東町	1			1		3	1	3				9
X．鍛冶町											1	1
Y．和泉町								1			1	2
Z．裏町			1					1				2
α．餌差町		1		1								2
β．安原町		1					1					2
γ．岡の宮				1								1
松本遊郭				2	2		1				2	7
浅間温泉		2	4	1		1					1	9
合　計	17	36	18	42	14	13	18	45	12	0	16	246

＊清水は14軒の蚕卵原紙製造業者を連名（41行）で紹介するものを含んでいるので、これを１軒とすれば、30行を超える紹介業者は２軒にとどまる。アルファベットは山内編『松本繁昌記』中編の掲載順に準じる。

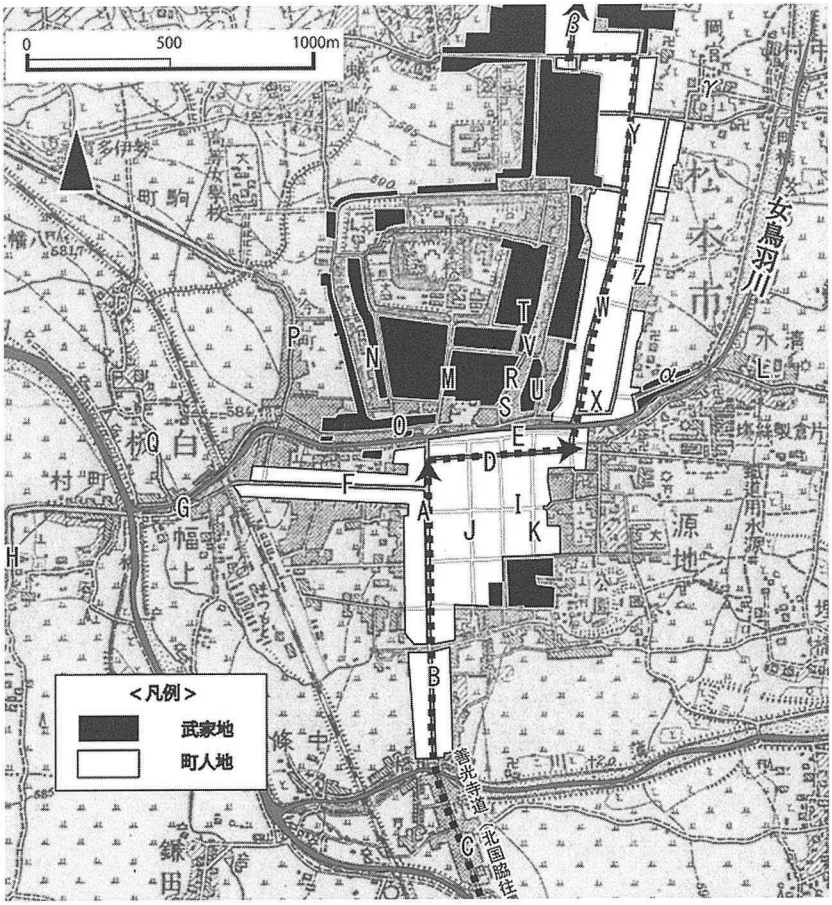


図２　松本中心市街地の町

＊明治43年測図２万５千分１図松本に、松本城下町歴史研究会編『よみがえる城下町・松本―息づく町人たちのくらし』を参照し加筆。図中の記号は表２で示した各町に相当する。

聞関係者が中心となって進めたものであった。そこで山内が所属していた「信陽日報」から現存する明治二〇年頃の紙面をみてみると、「信陽日報広告料定価　二拾字詰一行一日分金三銭・三日以上金貳銭五厘・七日以上金貳銭・但十行以上壹割引・貳拾行以上貳割引」と記されており、記述分量に応じた広告料の設定がされていた。⑤このように、出版元では新聞紙上における広告募集の方法という、応用すべきノウハウを既に持っていたことがわかる。

ただし、「信陽日報」や後継紙「信府日報」紙面上の広告をつぶさに見ていくと、掲載される業者は他府県に拠点

を置くものも目立ち、周辺地域の業者による広告が意外に少ない印象を受ける。例えば、「信府日報」明治二五年五月二九日、第二百八十四号には一二件の広告が掲載されているが、このうち東京、大阪など他府県からのものが四件あり、行政によるものや個人的な連絡を除いて、営利目的の地元業者により掲載された広告は三件に留まる。そこで、山内編『松本繁昌記』の出版に関与したいま一方の存在である地域出版業者の働きが浮かび上がる。近世から地域の書肆として存在した慶林堂高美書店は、豊田利忠『善光寺道名所図会』（一八四三）や十返舎一九『金草鞋』十三編（一八二〇）中に知人や取引先ともども描かれており、出版援助への見返りの広告としての意義がしられている。[6] 地域誌的書物を出版するに当たって、広告的記述の掲載と引換えに資金援助を募る手法は慶林堂などが熟知する手法であったと思われ、主に中編で紹介される商工業者の募集にはその深い関与が考えられる。

以上のように、山内編『松本繁昌記』の商工名鑑的内容は、各業者の名称や立地に加え、業態の別や販路までを紹介するものであった。ただし、それは業者からの資金提供と自己申告による情報に基づいていたと考えられ、全体として特定の偏りがある。次節では、その偏りについて検討していく。

第二節　商工名鑑的情報とその性質

山内編『松本繁昌記』と同年に出版された代表的な商工名鑑的出版物に、『第二版日本全国商工人名録』[7]（以下『商工人名録（二）』と略記する）がある。ここでは、山内編『松本繁昌記』の掲載情報がどのような特徴を持っていたのか明らかにしていく上で、この資料を比較参照していく。

『商工人名録（二）』は、経済史研究の立場から近代日本における商人の具体像を知る上で好個の資料とされるが、その収録データの問題点も明らかにされている。[8] まず、明治三一（一八九八）年時点で営業税を課されている商業者について約十分一程度、卸売商についても約半数をカバーするに過ぎないなど、採録されている業者がかなり上層に属するものとされている。また、商業と工業の区別を含めて、採録された業者が最適なカテゴリーに分類されていない場合や、重要な業務が書き漏らされている場合、掲載された業者の重複も認められている。[9]

『商工人名録（二）』が松本町について示す商工業者数は一一二軒であり、それに銀行、会社（新聞社を含む）一三軒を加えた一二五軒が記載されている。各商工業者は、町ごとに立地で区分される山内編『松本繁昌記』とは異なり、業種別に分けられてい

る。なお、山内編『松本繁昌記』と『商工人名録（二）』とでは、商号や通称で表記する前者と、事業者名で表記する後者の間で基準が一致しないことや、上述した『商工人名録（二）』がもつ問題点から、今回特定できなかったが、両書で一致して記載されている業者がさらに存在する可能性もある。

このような点を考慮しつつ、両書の採録業者を比較したところ、一二五軒のうち四九軒が一致して記載が確認され、加えて一一軒が一致の可能性を残すものの確証を得るに至らない業者となった。さらに、山内編『松本繁昌記』中編は二三〇軒の商工業者を記載しているが、『商工人名録（二）』中に山内編『松本繁昌記』には記載されていない五八軒の業者が認められ、両書とも採録に関する特有の偏りが認められる。

この五八軒中、会社に分類されるものを除いた五二軒についてみて見ると、繊維商二三軒、食料商一一軒、雑貨商九軒、製材木商四軒、窯業、薬商、金属商が各一軒、その他各種営業が二軒となっている。このうち、繊維商は松本町の『商工人名録（二）』記載業者数の約三分一、総数四〇軒を占めることから、『松本繁昌記』に掲載されていない二三軒を整理した（表3）。掲載総数の多い呉服太物商はともかくとして、糸類商および生糸買継商などの卸、仲買業者が、山内編『松本繁昌記』中編ではほとんど採録されていないことが目につく。また、立地については中町、および隣接する横町の業者の非掲載業者が多いことがわかる。これらの業者は山内編『松本繁昌記』のような出版事業に非協力的、あるいは無関心であったと考えるべきであろう。

以上のような前提をふまえ、記載情報の偏りをより詳細に検討するため、『商工人名録（二）』と山内編『松本繁昌記』中編が掲載する松本町の商工業者について、立地と業種別の分布の偏りを示したものが表4である。業種の分類は『商工人名録（二）』の既往研究に依拠して[16]、繊維商、食料品商、雑貨商、製材木製品商、窯業商、薬商、金属商、その他に分類した。

まず立地別の掲載業者数に関して両書の差異を見ていくと（図2参照）、本町、中町に関する業者が多数を占めている点は変わらない。異なる点として注目されるのは、山内編『松本繁昌記』で『商工人名録（二）』の四倍以上の業者数が記載されている伊勢町、大名町、六九町、東町、清水である。このうち、大名町、六九町は旧武家地である。六九町について、『商工人名録（二）』は繊維商しか紹介していないが、山内編『松本繁昌記』は食料品商、雑貨商、薬商なども紹介している。大名町に関しては山内編『松本繁昌記』記載業者の大半がその他に分類される理髪店や時計商、書店などである。ともに規模の点で突出せず、地域産業の

表3　『第二版日本全国商工人名録』採録の『松本繁昌記』非記載繊維業者

名　称	業　種	兼業種	立　地
井上與作	呉服太物商及古着		O．六九町
松田屋　井上吉平	呉服太物商及古着		D．中町
伊藤善次郎	呉服太物商及古着	太物商	K．宮村町
武井　落合源一郎	呉服太物商及古着	太物足袋商	B．博労町
油嘉　分部要衛	呉服太物商及古着	太物足袋綿肥料海産物商	A．本町
片瀬今朝太郎	呉服太物商及古着		D．中町（横町）
三原屋　高田善十	呉服太物商及古着		F．伊勢町
竹内源治	呉服太物商及古着		A．本町
加賀屋　中川佐四郎	呉服太物商及古着		D．中町
樽屋　増田武壽計	呉服太物商及古着		D．中町
穀屋　三原文七	呉服太物商及古着		D．中町
三沢　三沢重平	呉服太物商及古着		D．中町（横町）
生阪屋　三輪金六	呉服太物商及古着	兼古着食塩商	D．中町
奥州屋　土屋茂平	呉服太物商及古着	古着商	O．六九町
油屋　内川十次郎	呉服太物商及古着	兼海産物商	東川平町
原平兵衛	糸類商	綿糸太物足袋底商	A．本町
笹野屋　真崎勝太郎	糸類商	綿糸金巾太物商	A．本町
萬屋　浅田藤一郎	糸類商	洋糸砂糖綿蚕種商	D．中町
須田屋　三沢清七	糸類商	足袋底洋糸洋物綿商	A．本町
田中財治	生糸製造及買次商		I．高砂町（正安寺小路）
多田助一郎	生糸製造及買次商		β．安原町
丸山常太郎	生糸製造及買次商		L．清水
赤羽勝太郎	生糸製造及買次商		β．安原町

＊『第二版日本全国商工人名録』および山内編『松本繁昌記』より作成

特色も反映していない業種が集まっており、『商工人名録（二）』の掲載から漏れたものと考えられる。[11] 既往研究が示すように、松本においても『商工人名録（二）』は繊維商、食料品商を中心とした業種を多数擁する地区が重点的に記載される傾向にあったことがわかる。

一方、伊勢町、東町は旧町人地である。伊勢町は、本町、中町同様、繊維商、食料品商が卓越しているが、そのほとんどが『商工人名録（二）』では紹介されない。伊勢町が親町すなわち旧城下町の核心部に比べて商業地として新興地区であり、その業者は旧来からの有名商店が少なかったのか、あまり重視されていないことがわかる。これに対して、親町である東町は、山内編『松本繁昌記』掲載業者のほとんどが旅館である。東町の旧宿場町としての性質を示すこうした業者も、『商工人名録（二）』からは漏れていることが分かる。なお、近郊に位置する清水では、明治以降発達した湧水を利用した蚕卵原紙製作業者が一括して掲載されている。

次に、業種別の掲載業者数を見ていく。山内編『松本繁昌記』は繊維商、食料品商、雑貨商、その他に関して記載業者が多いが、『商工人名録（二）』はより繊維商が強調される結果となっている。食料品商、雑貨商では、山内編『松本繁昌記』が

表４　山内編『松本繁昌記』と『第二版日本全国商工人名録』中の採録業者にみる立地の比較

	繊維商	食料品商	雑貨商	製材木製品商	窯業商	薬	金属商	その他	合計
A．本町	16(16)	13(12)	12(11)	(1)	1(1)	3	(1)	16(5)	61(47)
B．博労町	4(6)	1	3(2)			4(2)		3(1)	15(11)
C．逢初町		1							1(0)
D．中町	7(9)	2(4)	2(2)	(1)	1	2(2)	1	6(3)	21(21)
E．裏小路								4	4(0)
F．伊勢町	7(2)	4	6		1(2)			8(2)	26(6)
G．巾上	1			1			1		3(0)
H．渚								2	2(0)
I．高砂町	1(1)	1	1					2	5(1)
J．飯田町		(1)	1	(2)			3(2)		4(5)
K．宮村町	1(1)	1(1)		2					4(2)
L．清水	1(2)			1				15	17(2)
M．大名町			2(1)					7(1)	9(2)
N．土井尻								1	1(0)
O．六九町	3(2)	3	1			1		3	11(2)
一ツ橋								(1)	0(1)
P．今町	2(1)	5						1	8(1)
Q．白板								3(1)	3(1)
R．辰巳町			1					3(1)	4(1)
S．緑町		2	1						3(0)
T．大柳町				1(1)					1(1)
U．上ヶ土		1	1			1		2	5(0)
V．下御馬出し		2						1	3(0)
W．東町	2	1(1)	1			1		4(1)	9(2)
X．鍛冶町				1					1(0)
Y．和泉町	1	1(1)	(1)						2(2)
Z．裏町				1				1	2(0)
α．餌差町				1				1	2(0)
β．安原町	(2)	1(1)		1					2(3)
γ．岡の宮		1							1(0)
横町	(2)	(1)							0(3)
宮淵						(1)			0(1)
芳川町								(1)	0(1)
詳細不明	(1)	(2)	(1)					(5)	0(9)
横田遊郭								7	7(0)
浅間温泉							1	8	9(0)
合計	46(45)	40(24)	32(18)	9(5)	3(3)	12(5)	6(3)	98(22)	246(125)

数字は山内編『松本繁昌記』の、括弧内のものが『第二版日本全国商工人名録』の採録業者数を示す。山内編『松本繁昌記』で複数の業種をかねるとされるものは最も強調されているもの、または単に最初に紹介されている業種で代表させた。なお、その他には銀行、会社に分類されるものを含む。

親町以外にも、伊勢町や旧武家地に立地するものを数多く取り上げていることがわかる。また、その他に該当する業者の内訳を見ていくと、運送業、書籍商、旅館が『商工人名録（二）』ではほとんど掲載されていないが、山内編『松本繁昌記』ではまとまった数が紹介されている。

以上のように、『商工人名録（二）』の掲載業者に比べて、山内編『松本繁昌記』が、親町以外に立地する多様な業種について詳細なデータを用意していることがわかった。これらは規模や取扱商品などの点で特殊なものではなく、卸売業者であっても小売兼業であったり、南信州といった旧来からの地域経済圏における販売先を重視する、地域に密着した業者といえる。これに対して、当時の遠隔地取引を主な業務とした生糸商について、『商工人名録（二）』に採録された経営規模で上層に位置する業者が、山内編『松本繁昌記』には採録されていないことも判明した。この点は、緒言には明示されていない『松本繁昌記』出版の文脈と関わっていたことが推測されよう。次章では、この点にも留意しつつ、繁昌記の出版をとりまく背景を探っていきたい。

① 長野県編『長野県統計書』明治二五および三〇年度版。

② 本文以外の情報として、冒頭に掲載される広告と写真がある。広告については蚕種業が四〇軒と最も多く、ほかに広く周辺地域や東京の商工業者、銀行、旅館なども含まれているため、松本町の商工業者は一二軒にとどまり、その内一〇軒が中編本文中で紹介されている業者と重複している。写真については市内の点景一四点と芸妓一六点を除く、のべ四六点が商工業者に関する写真であり、中編に採録される業者については三五点、後編に採録される秋蚕種業家は東筑摩郡のものだけがのべ一一点紹介されている。ただし、数が限られていることもあり、現段階では分析上有意義な手がかりとすることができなかった。

③ 松本城下町歴史研究会編『よみがえる城下町・松本―息づく町人たちのくらし』郷土出版社　二〇〇四年　一六～二五頁。

④ この点に関しては、明治三一（一八九八）年前後の「信府日報」をはじめとする松本町で出版された新聞の記事や広告が有力な手掛りとなることが予想されるが、これまでの調査では入手できなかった。松本町で出版された地域の日刊新聞とその保存状態については、山田晴通「戦前における松本の日刊新聞――ユタ日報と同時代の小さな新聞を読む――」（『ユタ日報研究』四　一九九八年　二～二九頁）参照。近世の出版と広告料に関する研究から、広告料の変動によって版ごとに広告が変動する例が知られるが、『松本繁昌記』に関しては上述のように版の違いが確認できず、そのような分析を十分行えていない。例えば、尾崎行也「解説」（『復刻諸国道中商人鑑中仙道・善光寺之部全』郷土出版社一九八九年　三～二五頁参照。

⑤ 明治一九（一八八六）年一二月発行分の「信陽日報」六八三～七〇六号（明治一九年一二月二日～二八日）には、紙面を改めるにあたって、連日冒頭に「代價低減の廣告」「紙面縮小の廣告」「無遞送料地區域擴張の廣告」および、「廣告料改定の廣告」が掲載されている。

⑥ 松本あめ市実行委員会編『松本のあめ市　その歴史と起源』高美書店　一九九七年　二一～二五頁、鈴木俊幸『一九が町にやってきた――江戸時代松本の町人文化――』高美書店　二〇〇一年　七～五三

頁参照。

⑦ 白崎五郎七編『日本全国商工人名録』日本全国商工人名録発行所一八九二年。なお、本稿では『日本全国商工人名録』緒言の表現を鑑みて、'Directory' の日本語での表記を「ダイレクトリー」に統一した。

⑧ 松本貫典「『日本全国商工人名録』から見た近代日本の商人分布」（『成蹊大学経済論集』三三（一）　二〇〇三年　七一～八三頁）。渋谷隆一「解題」（渋谷隆一編『明治期日本全国資産家地主資料集成Ⅰ』柏書房　一九八四年）一〇頁。

⑨ 松本貫典「近代日本における上層商人の実像――『日本全国商工人名録』と『明治人名事典Ⅰ～Ⅲ』による分析――」（『成蹊大学経済論集』三三（二）　二〇〇三年　八五～一四四頁）参照。明治三一（一八九八）年時点で営業税を課されている商業者について約十分一程度、卸売商についても約半数をカバーするに過ぎないなど、採録されている商工業者がかなり上層に属するものと考えられている。また、商業と工業の区別を含めて、採録された人物が最適なカテゴリーに分類されていない場合や、重要な業務が書き漏らされている場合などもあるとされ、採録者自体の遺漏や重複も認められている。

⑩ 前掲註⑧松本論文参照。

⑪ 鈴木喜八・関伊太郎編『全国商工人名録』第二版　一八九八年「凡例」一～二頁。「営業科目ノ分類ニ就テハ其地特有物産ノ売買製造ヲ第一ニ」とあり、各地の特色ある産業について注目して調査・編集を行っている旨が読み取れる。

第三章　地方都市における商工名鑑的「繁昌記」出版の文脈

第一節　鉄道の敷設と在来産業の再興

この章では、ここまでの山内編『松本繁昌記』の具体的検討を踏まえ、明治三〇年代の地方都市で商工名鑑的「繁昌記」が出版された文脈について改めて考察していく。その際、まず検討しておきたいのは、鉄道の敷設という契機である。

第二章での出版の意図に関する整理を振り返ると、山内編『松本繁昌記』以降では地域経済の振興へ資する目的を主張する点では一致していた。しかし、より詳細にみると、中澤『松本案内』以降では地域経済に関連して鉄道敷設への言及が際立っていたのに対し、山内編『松本繁昌記』緒言では言及がなかった。そして、中澤『松本案内』以降では、内容において鉄道による外来客の増加に伴って、しだいに商工名鑑的性質を離れ、旅客にアピールする旅行案内としての性質を深めたこともうかがえた。

しかし、山内編『松本繁昌記』が鉄道に無関心であったわけではない。実は、前編「松本の将来」の一節に鉄道に関する記述を見ることができる。まず、地理的に流通上の重要地を占めつつも、

太物類などの流通による過去の活況に比較して、現状の松本町の商業は、鉄道が敷設されていないので伸び悩んでいると主張する。

【史料六】　山内實太郎編『松本繁昌記』前篇三八～三九頁

其枢要の地を占めながら尚商界に重きを為ざる所以のものまた偶然ならざるなり曾て昔の書物を読むに松本の商業を叙して朝に千駄の貨物を出し夕に千駄の貨物を収むと云ひ故老も亦絞手拭等太物の盛大なりし所以を説き転商業退縮の感あらしむ然とも是等は必竟其偉麻質斯的発達の致す所にして只其鉄道の便を欠くより兎角手足外部に伸ぶる能ざるのみ

そこで、地域経済にとってのカンフル剤として待ち望まれたものの一つが鉄道の敷設であったと考えられ、鉄道交通と商業の発展に密接な関係があることを示唆し、鉄道による遠隔地との商取引の拡大によって将来の発展を期待する内容になっている。

【史料七】　山内實太郎編『松本繁昌記』前篇三八～三九頁

今や中央連絡の鉄道は三四年にして貫通せんとし北信鉄道又来て連接せんとす然るに此貫通連接の暁は即ち我松本一転機を与ふるものにして是迄の窮屈不自由とは引変り局促したる所の手足は以て東京に伸す可く以て関西に伸す可く以て北陸に伸す可く以て東北に伸す可く更に太平洋に出で更に支那海日本海に出で以て世界の大陸に馳駆す可く

同様の鉄道の敷設と地域経済の振興を結びつける論調は、同時期に他地域で出版された「繁昌記」にも認められる。例えば、明治三六（一九〇三）年出版の『甲府繁昌記』[1]では、鉄道敷設を地域産業拡大の機会ととらえる視点がうかがえる。

【史料八】　古川彦次郎著『甲府繁昌記』一～二頁

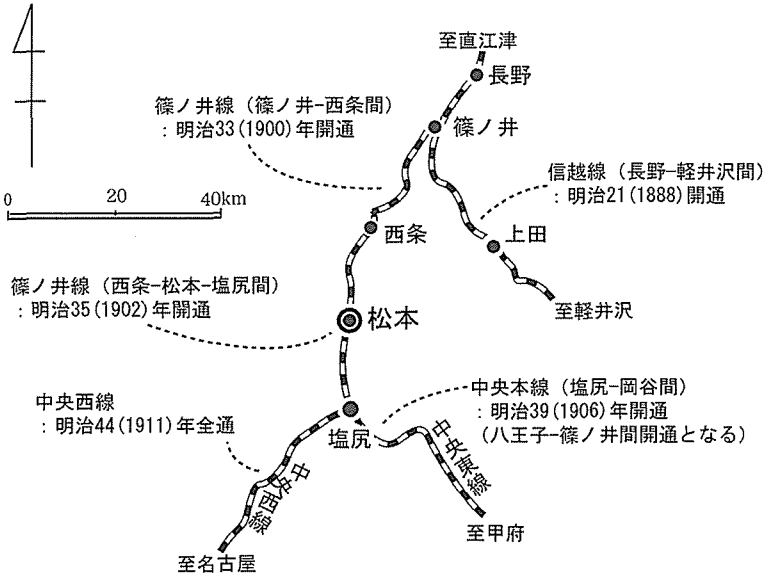
鉄道貫通の結果として内外の人士続々踵を接して、此名区に来遊す（中略）坐ながら全県の名物を周知しむるは、（中略）営業者の裨益亦大なるものあらん

また、明治三五（一九〇二）年出版の『金沢新繁昌記』[2]では、明治初期において経済的な打撃を受けた地域が、鉄道を中心とする運輸交通の発達によって立ち直ったという認識を示し、将来の鉄道延伸に伴ったさらなる発展も予想している。

【史料九】　林琢磨『金沢新繁昌記』自序一～二頁

北陸鉄道の貫通第九師団の建設等は著しく地方に潤沢を与へ（中略）異日北陸鉄道延長して（中略）我金沢をして現当の名古屋に代らしめ、商業の発暢工芸の振興は今日に幾倍

このように、経済的な閉塞感を感じていた地方都市にとって、[3]交通の発達を地域の産業振興の機会ととらえ、それを活かすための宣伝広告として商工名鑑的「繁昌記」の出版が目論まれたことが考えられよう。地方都市における商工名鑑的「繁昌記」出版の



松本町の鉄道敷設への道程

明治19(1886)年中山道鉄道計画廃止の閣議決定
明治22(1889)年甲信鉄道建設本免許状下付の見送り
明治25(1892)年官設中央線の鉄道敷設法公布
明治27(1894)年日清戦争勃発による篠ノ井線敷設工事着工の遅れ
明治31(1898)年経済不況による工事費の枯渇により篠ノ井線工事中断

図3　長野県松本町（市）を中心とした鉄道敷設関係図
各路線名は大正元（1912）年時点での呼称に依拠した。

有力な契機の一つに、鉄道の敷設があり、山内編『松本繁昌記』もこうした期待を共有していた可能性がある。

しかし、山内編『松本繁昌記』は鉄道が敷設される直前に出版されたため、その効果についての言及はみられない。また、松本町への鉄道敷設は紆余曲折をたどった（図3）。明治一九（一八八六）年の中山道鉄道計画の廃止に加え、明治二九（一八九六）年から三一（一八九八）年にかけて、日清戦争による経済不況や工事費の不足により着工の遅れや工事の一時中断を余儀なくされた。山内編『松本繁昌記』が出版されたのは、この鉄道敷設を前に焦燥感が募った時期にあたる。それは、在来の商業を中心とした遠隔地取引の発達による地域経済の発展への期待が素直に表出された例とみなすことができるだろう。

第二節　地方都市ダイレクトリーとしての「繁昌記」

続いて、商工名鑑的「繁昌記」という出版事業が導かれた文脈について考察する。その際、「ダイレクトリー」という出版物の日本への移入を手がかりとする。

日本における最初の「ダイレクトリー」であり、当時の全国的「ダイレクトリー」の代表例である『初版全国商工人名録』（以下『商工人名録（一）』と略記する）の編集著述の方針を巻頭言から見てみる。緒言では、想定される読者として実業家を挙げ、商工名鑑的な内容から地誌に至るまでをまとめて社会の実勢を知らしめる書物として、欧米のダイレクトリーを出版内容のモデルとして提示し、それを日本に導入する意義を以下のように主張している。

【史料一〇】　『初版日本全国商工人名録』緒言一頁

欧米諸国に於ては夙に「アルマナックダイレクトリー」若くは「ハンドブック」の類盛に行はれ、各国各地の主なる商工業者の氏名、所在、営業の種目、商標、所得額、税額、並に諸会社、商会、銀行等の種類、状況、収支取引の形勢より、各地産物商品の種類、集散、統計は勿論、運輸交通の形況、戸口、里程、商工業地誌に至る迄、苟も実業諸家の参考資料たる可き者は、細大網羅遺す所なく、以て実業家をして一目の下に社会の実勢を知らしめ、能く其間に処して機を制し、利を占むるの資たらしむ

また序文では、鉄道を含めた交通の発達によって地形的条件に制約された地域ごとの経済圏が解放されつつあることから、「ダイレクトリー」のような書物の必要を以下のように説いている。

【史料一一】　『初版日本全国商工人名録』序二～三頁

我れや国を開てより、星霜を経過すること茲に三十有余、今や山河の固を区画して互に自から守るの弊風を蟬脱し、山の峻、河の難、道路日に開け、鉄路歳に延び、（中略）我れ豈に亦た彼れが如き利便の著述なかるべけんや

前節でみた鉄道敷設という交通発達の契機が「ダイレクトリー」の出版と親和的であったことを示す内容である。

さらに、『商工人名録（二）』緒言によれば少なくとも明治二〇年代後半から三〇年頃にかけて、類似の内容が地域や業種を限定して出版されていたことがうかがえる。

【史料一二】　『第二版日本全国商工人名録』緒言二頁

方今世上類似の書を発刊するもの漸く多きに至りたるは、頗る喜ぶ可きの現象なるも、或は一地方に限り、或は一種目に

局し、

山内編『松本繁昌記』もこうした傾向に対応して、自地域を対象に類似する内容を含む書物として意図されたと考えられる。第二章でみたように、『商工人名録（一）』以前に出版された浅井・関口共著『松本繁昌記』には商工名鑑的内容が全く含まれていなかったことも、この点に関する傍証となるだろう（表1参照）。

実際に「ダイレクトリー」の影響をより直接に表現している他地域の「繁昌記」の例として、明治三〇（一八九七）年出版『中京繁昌記』[4]がある。その緒言では、『商工人名録（一）』緒言（【史料一〇】）とそっくりな文面・内容で「ダイレクトリー」に言及したり、『商工人名録（一）』の内容が不十分であると暗に示し、地域のより詳細な情報に絞って紹介する書物が目指された旨が主張されるなど、その影響下にあったことがうかがえる。

【史料一三】　小林儀三郎著『中京繁昌記』緒言一頁

泰西各国に於ては実業社会の発達を図らん為めハンドブツクアルマナツク、ダイレクトリーなど称して全国各地の重なる実業家の氏名其他営業に関する万般の事を記し（中略）我国に於て二三年前東京市に於て斯る書籍の発兌を見るに至りしも未だその完全たるを見ず

このように、地方都市における商工名鑑的「繁昌記」の出版に、『商工人名録（一・二）』をはじめとする「ダイレクトリー」の影響があったことは間違いないだろう。

ただし、その内容には地方都市における出版であることによる、特有の性質も反映されている。山内編『松本繁昌記』の場合では、前章でみたように、質・量共に中心を占める中編で地元地域に密着した卸、小売業が数多く紹介されていた。これは、前節で見た、鉄道敷設を契機として遠隔地取引を通じて商業の発展を期待するという出版の目的とは齟齬をきたす内容である。さらに、中編の業者紹介文を見ても、鉄道への言及はわずか二軒にしか確認できない。その内容も、兵営設置や内地雑居と同一視した新たな商機の一つに過ぎないと捉えるもの（【史料一四】）、停車場の設置による町内の人通りの変化に期待するもの（【史料一五】）にとどまっている。

【史料一四】　山内實太郎編『松本繁昌記』中篇六三頁

高美屋書店（中略）将た来らんとする兵営設置鉄道開通内地雑居等に関しては大に見る所あり

【史料一五】　山内實太郎編『松本繁昌記』中篇九六頁

常磐屋漆器店（中略）現下の博労町たる較々当地の南端を為して多少遺憾の事あるべけれども近く鉄道開通の日に至り其の西方近距離の地に一大停車場を見たる暁には南北交通の便

利を得ると同時に町内の殷賑を来し

このように、中編の業者紹介文中にみる鉄道への意識は、鉄道による遠隔地との取引の拡大ではなく、むしろ鉄道関連施設の設置などによる周辺地域からの集客力の増加に期待する内容になっており、比較的狭い周辺地域の商圏を対象としたものといえる。

対照的に遠隔地取引の拡大に主眼があるのは、後編に採録される秋蚕種業家の紹介文である。前章でみたように、販路については遠隔地が重点的に取り上げられていた。また、以下に見るように、遠隔地との取引の拡大による地域産業振興の意識が明確に現れており、鉄道による遠隔地との取引の可能性が語られる。

【史料一六】　山内實太郎編『松本繁昌記』後篇二二二～二二三頁

東筑摩郡「野々山義成氏」（中略）明治廿八年秋蚕種需給者大会を松本町に開き（中略）其結果鉄道にて蚕種を運搬する上に付大に改良を為すことを得たる実に地方の為め尽力せし人というべし

ただし、紹介される秋蚕種業家の大部分は松本町外に居住しており、その流通も松本町の在来商業者が直接関われるものではなかった[5]。本文中で紹介される業者と松本町中心市街地との距離も認識されており、鉄道の開通によってようやくこの距離が埋められることを示唆する内容になっている。

【史料一七】　山内實太郎編『松本繁昌記』後篇二六三～二六四頁

南安曇郡「有信館」（中略）同館は松本を距る二里十八丁篠ノ井線開通の暁には田沢停車場より三十五丁糸魚川街道より入ること六七丁の所に在り

編著者が期待した地域の発展とは、あくまで流通上「枢要の地」を占める、松本町の商業的発展であった（【史料一】）。このことは中編に割かれている分量が最も厚いことからもうかがえよう。

さらに、第二章で見たように、山内編『松本繁昌記』中・後編における記述内容が、掲載される業者からの「心付」としての出資金や自己申告による情報に基づいていた可能性があった。商工業者にとって、山内編『松本繁昌記』採録の意味は新規顧客の開拓や宣伝広告にあったはずである。しかし、それが「心付」の拠出という負担を要請されるものであったならば、遠隔地取引を主とする卸売業者にとって、地方出版元による商工名鑑的「繁昌記」は頒布される地域や対象が限られるので、周辺の狭い範囲にしか影響力を持ち得ない宣伝広告であり、魅力は少なかったであろう。

その結果、山内編『松本繁昌記』は、より多くの掲載される業者を必要とする出版企画上の要請と、近隣地域において幅広い新規客層の発掘を目指す小売業者の思惑が一致して、その中核をなす中編が、流通の末端である消費者に主眼がある小売業者便覧のようなものになったと考えられる。こうした問題点を編著者も理解していたと考えられ、中編冒頭では「有名なる商店の紹介」が小売店の紹介に他ならないことを暗に示している。[6]

「ダイレクトリー」導入の本来の狙いが、交通の発達に伴って遠隔地取引に参入したい商工業者の情報を発信することであったとしても、松本町のような地方都市においては、都市中心部をになう在来の商業は遠隔地取引に関わるものが少なかった。このように、地方都市における商工名鑑的「繁昌記」は出版企画の経済的問題から、出版の目的と掲載内容にズレが見られる、独特の「ダイレクトリー」受容の形態といえるだろう。

① 古川彦次郎『甲府繁昌記』錦巧堂　一九〇二年。
② 林琢磨『金沢新繁昌記』宇都宮書店　一九〇二年。
③ 第一章註①松村論文参照。
④ 小林儀三郎『中京繁昌記』山陽館　一八九七年。
⑤ 明治三〇年前後の松本町周辺地域は「全国秋蚕の本場」として知られるようになったとされるが、その流通は販売上の悪弊を排除するため、松本町周辺地域の蚕種業者からなる東筑摩蚕糸業組合や東筑摩郡蚕種同業組合の管轄下にあったとみられ、在来の松本町商人が参入する余地はあまりなかったと考えられる。（第二章註①　三八八～三九〇頁参照。）
⑥ 以下のように記している。「新聞の廣告潮の如く告状の散布落葉に似て往々撰擇に苦しむ（中略）茲に紹介の欄を置き松本六千戸の市中に在り親切勉強の評判ある各種の商店を掲載せり」山内編『松本繁昌記』四三頁参照。

おわりに

本稿は、長野県松本町で明治三一（一八九八）年に出版された山内實太郎編『松本繁昌記』を事例に、商工名鑑的「繁昌記」の都市史研究における史料的意義について検討した。

まず、松本町（市）で明治・大正期に出版された「繁昌記」とその類書を整理し、これまで都市史研究では積極的に意義付けられることのなかった「繁昌記」を考察し、明治三〇年頃の「繁昌記」を単なる戯作的「繁昌記」の衰退とみるのではなく、商工名鑑的「繁昌記」として積極的に位置づけた。次に、焦点となる商工業者紹介の内容を整理したうえで、内容に偏りがあることを見出し、採録者側の申告の記述内容への反映や、それによる多数の小売業者の採録、販売先としての南信州をはじめとした近隣地域の重視などを指摘した。さらにこうした内容を、同年出版の代表

的「ダイレクトリー」である『全国商工人名録（二）』に収録された松本町に関する内容と比較検討した。松本町の商工業者分布について、山内編『松本繁昌記』がより雑多な小売業に関して詳細な内容であることを示した。最後に、なぜ明治三〇年前後に商工名鑑的な「繁昌記」が出版されるようになったのかを考察した。まず、地方都市における商工名鑑的「繁昌記」の出版をもたらした機運の背景に、地域経済の振興と鉄道敷設などの交通発達の関係があったことを示した。続いて、そうした機運が地方都市での「ダイレクトリー」受容という文脈に沿い、商工名鑑的「繁昌記」の出版へとつながった点を指摘した。また、全国版「ダイレクトリー」とは異なる地方都市特有の問題が存在することも明らかになった。

以上のように、本稿では、商工名鑑的「繁昌記」が「ダイレクトリー」の地方都市における受容を背景とした独特の出版物であり、またそれゆえに時代と地域の文脈を色濃く反映していることを指摘した。このことから、商工名鑑的「繁昌記」は明治三〇年頃の、商業が地方都市における中核産業であった時代について、より深い理解を助ける史資料といえるだろう。

とはいえ、本稿は基本的に山内編『松本繁昌記』という一事例に即して議論を進めており、限界を有している。得られた知見が、当該期の地方一般に敷衍する事ができるかについてはさらなる検討が必要となる。課題としたい。

［付記］ 本稿は二〇〇五年三月に京都大学文学部へ提出した卒業論文の一部に大幅に加筆修正したものである。現地調査、資料収集においては、松本市文書館、松本市中央図書館、松本市役所の皆様に多大な御協力をいただきました。以上、記して深くお礼申し上げます。

（京都大学文学研究科博士後期課程）

The Compilation of Hanjōki, Accounts of Prosperity, as Trade Directories for Local Cities During the Late-Meiji Era: A Case Study of Yamamoto Jitsutarō's *Matsumoto-Hanjōki*

by

AMIJIMA Takashi

In the recent studies on modern urban history in Japan, various new sources have been discovered and used to analyze the structure of historical urban space. Private organizational maps and directories have also attracted great interest. In the light of these trends in research, the present paper reintroduces and examines *hanjōki*, accounts of prosperity, that were published during the Meiji era (1868～1912) throughout Japan (but have mainly been treated as popular literature in earlier studies) as new material for modern urban historical research. As a case study, this paper mainly examines Yamauchi Jitsutarō's *Matsumoto hanjōki*, which was published in Matsumoto town, Nagano prefecture in 1897.

First, this paper compares the *hanjōki* with similar publications released in Matsumoto during the Meiji and Taishō eras (1868～1926) and evaluates *hanjōki* published in the late Meiji era (after 1898) positively as urban trade directories rather than as an etiolated form of comic *gesaku* literature.

Second, this paper examines the contents of *Matsumoto hanjōki* as a directory of commercial institutions and points out that there existed certain biases that reflected the reports of the selectors and resulted in an emphasis on the merchants of the southern Shinshū area and its environs etc.

These biases are analyzed in the light of a comparison with the contents about Matsumoto that are found in another directory, the *Zenkoku shōkō jinmeiroku* (National Directory of Commercial Proprietors), which was published in the same year and was a typical nationwide trade directory at the time. *Matsumoto hanjōki* is shown to cover retail shops and small wholesalers whose customers also lived in the vicinity in greater detail.

Finally, this paper considers the reasons behind the publication of *hanjōki* as an urban trade directories in the late Meiji era throughout Japan in two contexts. The first context pertains to the growth of commercial traffic at the time. The authors of *hanjōki* wanted to promote regional commercial development through railway

construction in the mid-Meiji era (1897～1907). The second context pertains to the import of European directories. Inspired by European directories, the first Japanese directory, *Nihon zenkoku shōkō jinmeiroku*, was published in 1892 in Tokyo, and it encouraged many local city publishers to publish more detailed directories that were centered on their own regions. Such local publication of local city directories faced the problem of raising sufficient capital. To solve this problem, *hanjōki* publishers were required to gather advertising revenue and the contents of their local directory thus contained certain biases.

As urban trade directories, *hanjōki* can help in building a profound understanding of the local cities in the mid-Meiji era (1897～1906) and their social contexts.